

巻頭言

「気づくこと」の大切さ

多摩森林科学園長

藤井 智之

地球温暖化や廃棄物問題、身近な自然の減少などの環境問題を解決して持続可能な社会を構築するためには、積極的な環境保全活動が重要です。そのために、環境教育を推進して、国民一人一人の意欲を高めていくこと等を目的として、平成15年7月に環境教育推進法が制定されています。平成16年9月に閣議決定された環境教育推進の基本方針では、問題の本質や取組の方法を自ら考え、解決する能力を身につけ、自ら進んで環境問題に取り組む人材を育てていくために環境教育が必要であるとされています。

森林はその多面的な機能により、有史前から人の生活環境に大きく貢献し、人間の生活・文化・文明を支えてきました。森林の多面的な機能を理解・維持・活用し、持続可能な森林経営を通して、循環型社会を構築することが重要であり、そのための教育としての森林環境教育が期待されています。一方では、自然豊かな森林は、自然の不思議を五感で体験し、科学に興味を持ち、自然の中で心を癒し、自己の存在確認をすることができ、子どもたちの人間形成にとって効果的な「環境教育」のフィールドとして活用できると期待されています。

ところで、「仏像 一木にこめられた祈り」と題する東京国立博物館の特別展が森林総合研究所も協力して開催され、2ヶ月間に33万人に達する入場者がありました。その第二章「一木彫の世紀」には奈良時代から平安初期にかけての数多くの一木彫の名品が出展され、作品解説では用材樹種が「カヤと見られる針葉樹の一木」と曖昧な仏像もありますが、「カヤの一木から彫出」と明確な仏像もありました。このような用材樹種の記載には顕微鏡観察による樹種識別の結果が反映されているのですが、それらの樹種調査のきっかけは研究協力を求めて東京国立博物館の研究者が森林総合研究所を訪れたことにありました。カヤの木材には仮道管のらせん肥厚（参考：研究の“森”からNo.73）という極めて顕著な特徴があることは木材科学の分野ではよく知られていますが、顕微鏡観察に必要な木片を試料として採取するために貴重な文化財を傷つけることは許されません。しかし、木彫像から剥落する微少な木片があることに気づいて、それが仮道管のごく一部分の数十ミクロンの断片でも識別が可能であるとの知識と一つになって初めて樹種の識別が可能となったのです。

知識を基盤として「気づくこと」が大切であることは環境教育においても同じであり、環境教育の目的は、知識の集積に留まるのではなく、自分の生活自体を見直して、「気づいて」、改善するという行動に結びつけることにあります。循環型社会の実現のための科学技術等とともに、知的蓄積を形成する基礎研究が科学技術政策の目標として第3期科学技術基本計画に位置付けられていますが、そこでは「モノから人へ」を基本姿勢としているように、科学技術や教育など競争力の根源である「人」が重視されています。多摩森林科学園でも、次代の科学技術を担う人材の育成を視野に学校教育との連携を深め、観察・実験等の体験的・問題解決的な「気づき」の学習の場としての科学園整備と環境教育研究を推進していく所存です。

